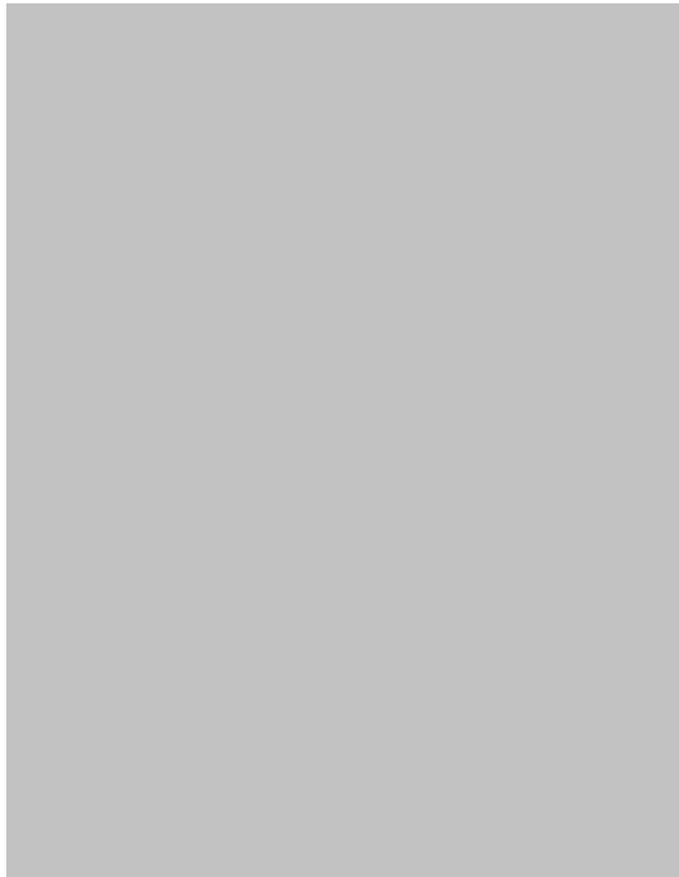


ハンス・コパー

《ポット》



ハンス・コパー (1920-1981)
《ポット》

1970年頃
陶土、轆轤成形
高さ23.8, 幅13.5, 奥行6.5cm
平成26年度購入

Estate of the artist
撮影:アローアートワークス

二

○世紀を代表する陶芸家のひとり、ハンス・コパーが陶芸の道を進んだきっかけは偶然の出会いからでした。ナチスの迫害から逃れるために故郷のドイツからロンドンに渡ったコパーは、一九四六年、移民や亡命者の救済をおこなっていた知人の紹介でオーストリアから亡命しイギリスで活動を始めていた陶芸家のルーシー・リーに出会い、リーの工房で陶製ポタン作りのアシスタントとして働き始めます。それまでコパーに作陶の経験はありませんでしたが、リーの仕事を間近にしながら陶芸の魅力にひきつけられていきました。

コパーは驚くほどの速さで土の仕事を覚え、リーもその才能を見抜いて夜間の美術学校へ行くことをすすめます。昼間は工房で働き、夜間は美術学校に通って陶芸の技術を習得して、やがて工房でも重要な役割を担うようになります。コパーが轆轤で成形したものに、リーが釉薬や模様を施したテーブルウェアなどを共同で制作し、それらは百貨店等で販売され好評を得ました。その後は自身の作品を制作するまでになり、一九五〇年にはリーとの共同展を開催するほどに成長していきました。

ハンス・コパー作品の特徴は、それまでの陶芸には見られなかった器形とモノクロームの色合い、そして表面の独特な質感です。本作は、別々に成形されたパーツ

を組み合わせる「コンポーネント・ポット」の手法によるもので、各パーツはすべて轆轤で形作られています。図版は作品を正面から見た様子ですが、真横から見るとささやかにふくらみを持たせたふたつのディスク型のパーツが向かいあわせに接続され、合計四つのパーツで構成されていることがわかります。

また、作品の表面は、黒や白の化粧土をかけて乾かし、研磨し、搔き取るという工程が繰り返され、土が素材であることを強調するかのような表情になっています。刻まれた線文の溝。焼成前の乾燥で土が収縮したかのような皺。繰り返しかけられた化粧土の縮れ。そして化粧土の気泡が割れている部分を通して、下に塗り重ねられた濃茶や赤茶の色が見え隠れしています。

本作はコパー晩年期の作品ですが、上部に口縁部、中央のディスク型の下に筒状の土台があるこの器形は、一九五〇年代から繰り返し制作されています。初期の作品はサイズも大きく重量感のある作風でしたが、年を経るにつれて、よりシャープに、より軽い質感に変化しています。注意深く作り上げられた複雑な質感と余分なものをそぎ落とし鋭角な輪郭線と柔らかな曲面を併せ持った器形からは、コパー独自のスタイルの円熟期をうかがえます。

(工芸課客員研究員 内藤裕子)